

2019年1月
1152号

百葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5

(一冊の会研究室)

尾崎行雄と相馬雪香の信念と生き方を受け継いで

～新しい年の始まり 1月櫻華塾～

澄み渡る晴天に恵まれた1月20日、尾崎行雄記念財団応接室にて新年第1回の櫻華塾が開催されました。メンバーの今元さんがご主人と可愛いお子様と一緒に家族3人で参加し、和やかな雰囲気での新年スタートとなりました。

【FAWA に向けての活動報告】

年末年始も、2020年度に東京で開催予定のFAWA(アジア太平洋女性連盟)に向けての活動を地道に続けておりました。神戸から参加している河野さんが3月22日開催予定の「講演と音楽の夕べ」のチラシが完成したことを報告。



また、FAWA そのものを紹介するパンフレットも完成いたしました。FAWA と一冊の会の概要、大槻会長の想いがわかりやすく、熱意を持ってまとめられております。河野さんのFAWA への意気込みに、一同のFAWA への思いもより鮮明になった事と思います。

小山副会長から「このパンフレットの中に書かれている事を、ただ紹介するのではなく自分の言葉として語りましょう！東京だけではなく日本全国から参加者を募りましょう！」と、力強いお言葉がありました。

【何が真実か】

前回から櫻華塾に参加した相馬さんが、村木厚子氏著『日本型組織の病を考える』を「私の推薦本」として紹介いたしました。メディアが報じるニュースの“何が真実か”を深く考えさせられる一冊です。

小山副会長が、著者である村木元厚生労働事務次官が冤罪により逮捕された当時、赤松先生と共に支援活動に真剣に取り組んだ思い出を語られました。権力と戦い自分の意思を貫くというのは難しいことだが、それをやりとげた村木さん。二度とこのようなことがあってはならない、との小山副会長の言葉に、一同しっかり勉強をし自らの頭で何が真実かを考え行動する決意を、改めていたしました。

【浅倉むつ子教授の最終講義に出席して】

箱根常任参事より、大槻会長の代理として出席した、早稲田大学浅倉むつ子教授の退職記念・最終講義の報告がありました。浅倉教授は、住友セメント事件の報道に啓発を受けて以来、一貫して女性中心の労働法について学び、多くの著書、論文を発表してこられた方で、その長年の研究を総括する形での講義となりました。

労働法の分野で女性を中心にアプローチしても出世しないよ、と先輩方々に何度も言われながらも初志貫徹で、学会のみならず、厚生労働省、内閣府でも様々な要職に付かれるなど素晴らしい功績を残されています。

講義後の懇親会では、労働法について、女性の地位やジェンダーについて長年の研究、行動をされている人々が集う中で、大槻会長と小山副会長が、どれだけの時間を使って山下泰子先生や、林弘子先生をはじめ、一流の先生方との交流を深めてこられたかを肌で感じる空気でありました。浅倉先生には2007年に多摩のFAWAにて講演をしていただいたご縁もごさいます。

その報告に、1975年メキシコでの第1回世界女性会議に参加した大槻会長が、有識者の中でどんな思いと努力、勉強をされて人脈を築いていったか、思いを馳せました。そして、箱根常任参事は「2年後のFAWAに向けて、まずは“3月22日の講演と音楽の夕べ”へのお声掛けを着々と進めております」と、すでに次に向け動き出しており、遅れをとらないよう、2年後のFAWAに向けて活動を開始しなければならないと決意いたしました。

【石田理事長の講演】

年始の講演として、石田理事長より「尾崎行雄と相馬雪香の信念と生き方」について、力強い講演がありました。文字数の関係で一部抜粋とさせていただきます事をご了承下さい。

◆尾崎行雄の信念・生き方は、とりも直さず、相馬雪香の信念・生き方である。尾崎が最も問題にしたのは、国民・民衆一人ひとりの在り方。1917年、尾崎は当時の政党に対し「感情やしがらみで結びつき、国の利益よりも党の利益に走っている」と批判した。あれから100年経ち、皆さんも記憶に新しい2017年秋の総選挙。尾崎が100年前に言った、しがらみ、利害、自分の当落のためだけに動く政治家が、今の日本にいない問題はなし、尾崎財団も必要ない。しかし一昨年、我々はまざまざと（その姿を）見せつけられてしまった。ただ、そうしたのは誰か？誰がそんな政党を作ったのか？尾崎に言わせれば「その様な政治家を選んだ国民の責任」ということ。これが民主主義。民主主義は、それを守るための努力と覚悟を我々一人ひとりが持っていないと、あっという間に後戻りをしてしまう。この民主主義の危うさを分かっていた尾崎は、とにかく有権者一人ひとりの在り方を厳しく説き続けた。この事を忘れてはいけない。そしてこの有権者に対する厳しい目、民衆に対する厳しい言葉は、相馬雪香にそのまま受け継がれている。◆尾崎行雄は、政府の不当な圧力や権力を批判したが、一方で国民に対しても厳しい目を向けた。これは、相手がどうこうではなくて、何が正しいかを考えたから。「誰が正しいかではなく何が正しいか」これは非常に重要なキーワード。あの人言うんだから正しい、政府が言うんだから全部正しい…そう思った時点で思考が停止する。あるいは、国民が言うんだからすべて正しい。民主主義だから国民の言う通りに動くのが政治の正しいやり方だ。とも尾崎は言わない。国民でも間違ふんだということをちゃんとと言える。権力に対しても、民衆に対しても、また自分の仲間に対しても、間違いを間違いだと言える。「誰が正しいかではなく何が正しいか」という姿勢が尾崎と相馬の中にながら入り込んでいる。◆尾崎は「憲政の神」と呼ばれた一方で、「国賊・非国民」とも罵られた。幼い雪香は父に尋ねたことがある。「お父さんの言ってること、やってることは間違ってるんですか？」と。尾崎はこう答えた。「間違ってるかどうかは雪香さん、あなたの頭でしっかりと考えなさい」と。これも非常に大事なこと。我々は尾崎が言うから何でも正しいと思ってはいけない。尾崎が言うから、相馬が言うからではなくて、じっくりと自分の頭で考えて答えを出していく。この大切さを尾崎は相馬に伝えている。◆尾崎行雄と相馬雪香には4つの共通点がある。1つは、何事もあきらめない「不屈の精神」。2つ目は「日本を世界から孤立させないという信念」。3つ目は「出来ることから始めるという行動力」。そして最後は「物事を公正・公平に見る判断力」。本当に正しいかどうかは、その人の言ってる中身を、我々がきちっと自分の頭で考えなければならぬ。それがあって初めて民衆一人ひとりの力が成熟し、大きくなっていく。まさに尾崎が厳しく説いた姿勢であり、相馬が自ら実践していった姿勢。さらに相馬さんには4つの心があった。「本気の心」「純粋な心」「利他の心」「感謝の心」。この気持ちを、我々一冊の会はしっかりと受け止めて、一人ひとりがそれを持つことが大事。◆1950年、スイスで行われた国際会議で相馬さんはフィリピンの上院議員ペクソン女史と出会った。それが一つのきっかけとなって、1959年にFAWA（アジア太平洋女性連盟）が設立された。そして相馬さんが亡くなる前年（2007年）から今日まで一冊の会がFAWA日本代表を務めている。先程言った尾崎行雄の精神や相馬雪香の精神、あるいは相馬さんの心。こういったものを一番大事にしているのが、この一冊の会。だからこそ、我々一冊の会がFAWAを相馬雪香から受け継いでいる。2020年度には「FAWA国際会議 in Japan」を一冊の会が中心となって開催することが決まっている。これから多くの人たちに呼びかけていく。その時に、自分が本当に伝えたいと思うことを、自分の言葉で伝えていくことが大事。例えば3月22日に予定している「講演と音楽の夕べ」についても、一冊の会とはこういう会で、そこで親善大使のドンアルマスが我々の活動を応援するために演奏してくれる。あるいは我々の活動に賛同してくださっている世界銀行の専門家の方が講演をしてくれる。そして皆さんからいただく参加費は、この一冊の会を通じて被災地や途上国の支援、FAWAの準備に役立たせていただきます。どうぞ我々に任せてくださいと堂々と胸を張って言える位になっておかなければいけない。◆2020年が終わりではない。FAWAを成功させて、また新しいスタート地点に立つ。それが「人生の本舞台は常に将来に在り」という尾崎の言葉の意味。

そして相馬雪香は自らそれを実践して、生涯現役だった。我々もその思いで行かなければならぬ。いくら大きな目標を掲げても、目の前の一步一步を大事にして、真面目に地道に取り組んでいかなければいけない。その一つ一つを積み上げていった先に成功がある。尾崎や相馬、そしてそれを一生懸命伝えようとしてきた大槻会長や小山副会長、あるいはここにいる先輩方の思いも我々はしっかりと受け止めて、大事にして、2019年の今年、一緒に頑張っていきましょう！



文責：相馬亜紀、赤田研究員